

大好き！絵本

初瀬 恵美



『クリスマスのはし』
さく: ジョセフ・スレイト
絵: フェリチア・ボンド
出版社: 日キ販

気がつけば、もう12月。早いですね。今年も、イエス様のお誕生を劇にした「聖劇」に幼児クラスが中心となって取り組んでいます。

そこで、今月は、森の動物たちが「聖劇」に取り組むおはなし『クリスマスのはし』の絵本を紹介したいと思います。(これは、保育園にある絵本で、現在は『やまあらしぼうやのクリスマス』とタイトルを変えてグランママ社から再販されているようです。)

主人公のやまあらしの子どもは、トゲトゲの針をもつ容姿から、他の動物たちから仲間外れにされて、劇の役がもらえませんでした。頑張っ、劇がしたいと皆に言っても「だめだよ。きみは おかしな すがたを しているから。」と言われてしまいます。それでも、頑張っ「そんな いいやくでなくて いいんだよ」「ひつじかいをしたいな」というと、ひよこに「だめよ。わたしが こひつじのやくを するんだから。やまあらしさんの とげがささったら いたいわ。」と言われてしまいます。

どんなに、他の動物に頼んでも、やっぱり役はもらえませんでした。そしてとうとう、発表会の当日を迎えてもやまあらしの子には役がなく「ツリーをたてろ！ とげのゴムまり」などひどい言葉をあびせられます。それでも、一生懸命裏方の雑用をして、劇が円滑にすすむように動きました。その努力の結果、劇は順調にすすみました。しかし、観客のお父さんやお母さんが星がないことに気がつきます。聖劇の中で星は、イエス様がお生まれになったことをみんなに知らせるとても重要な役目をします。その星がなかったのです。今まで、横柄だった動物たちは、動揺してあわてて走り回りました。そんなときやまあらしの子どもは「ぼくが なんとかするよ。みんな うごかないで」とうまく機転を利かせます。さて、どんな機転を利かせたのでしょうか。

この絵本を口に出して読むと、あまりにひどい悪口に心が痛くなります。しかし、それに負けないやまあらしの子どもの心の強さと、「聖劇」への情熱を感じました。

これは絵本ですが、現実社会でも、人を傷つける言葉は多かれ少なかれ耳にします。例えば保育園で日頃仲良く遊んでいると思われる子どもたちの間でも、キツイ言葉を耳にすることがあります。その言葉が持つ鋭さにハッとさせられますが、なぜそのような言葉を言ったのか尋ねてみることもとても大切な事だと思います。例えば、「仲良しの子が他の子と仲良くして、嫌な気持ちになってつい悪口を言ってしまった」…とか。しかし、急に悪口を言われた子はとてもショックを受けます。そんなときはお互いに、お互いの気持ちも素直に伝え合うことが必要で、思いを伝え合うことで、お互いの思いを知る機会にもなっていくのだと思います。そんな子どもたちの橋渡し役ができたらと思います。少し話はそれてしまいましたが、やまあらしの子どものように、生まれ持った特性は、本人の力でどうすることもできません。その特性が、少数派であればなおさら、偏見やハラメントの対象になりがちです。それに対する悪口は、どんな事情があってもいけないということ、自分が言われたらどう思うかを考える機会をこの絵本は作ってくれるなと思いました。また一方そのような状況でも、やまあらしの子どものように、明るく前向きに、楽しく生きてくことができることはとても大切な事で、そのように人生を過ごすことはとても素敵な事だと教えてくれる一冊です。



現在はタイトル変更
出版社: グランママ社
より

誕生日おめでとう

